

科目名称		英語教育コミュニケーション論	
		(担当教員名： 中田賀之)	
課程	： 大学院（修士）1年次	開講学期	： 後期
授業形態	： 講義	授業規模	： 30人以下
インタビュー対象教員名		中田賀之	
(実施日時：7月3日13時10分～13時55分；実施場所：総合研究棟3階中会議室)			
インタビュー対象受講者名		西田智恵子	
(実施日時：7月3日14時～14時30分；実施場所：総合研究棟3階中会議室)			
選定理由			
【授業の意図】			
<p>この授業は、主体的に学習に取り組める学習者を育てるための理論（自己調整学習）について学び、そのための教師の支援の質や授業のあり方について自身の視点を養うことを目的としている。具体的には、①学習者が学習の行為主体者になるとはどういうことか、②英語力（特にライティング力）とはどのようなものか、③教室内英語とはどのようなものか、などについて学ぶ授業である。</p>			
【授業の工夫点】			
<p>本年度は、現職3名、ストレート2名と、少人数の受講者であったが、自身の英語学習履歴などのテーマについてお互いに（2～3名で）インタビューし、後で結果を共有し分析するという活動を複数回、相手を変えて行い、議論が停滞していると講師も加わっている。</p> <p>また、ディスカッションの時間を多く持ち、議論が停滞し講師が加わる場合、学習者から出てきたキーワードから広げるようにし、本人に考えさせるように持っていつている。講師の言葉を借りると、“ディスカッションの機会が無いと知識が追って来ない”とのことである。</p>			
【学生の参画度を促すための工夫】			
<p>生徒も教師も自律的に主体性を伸ばせる雰囲気为学校の教室で創造することが大切であると事前に講師から伝えられており、受講者はそれを、この授業のなかでも実感している。</p> <p>すなわち、「質問に真摯に答えてもらえた。受講生のことを考えてくれている。」と受講生に受け止められていて、教室内では何を言っても安心という雰囲気を実感していた（受講生へのインタビューから）。やろうとする姿勢をもたせることは授業の意図でもある。</p>			
【総括】			
<p>高校では、英語の授業は英語で行うことが求められており、教師はどのような授業を行えば良いのか不安を抱えている。生徒も教師も、英語を学習する目的を深く考え直す機会あるいは視点をもちにくいことが分かる。このような課題意識を持っていた受講生がこの講義について、「毎回の授業が発見の連続だった。」、「抱えていたモヤモヤが解消した。」、「すべての授業中の活動、課題へのアプローチの仕方が理にかなっていた。」、「学力を上げなければ、という義務感を持っている教師がこの授業を受けると様々なものから解き放たれると思う。」と感想を述べている点からも、「英語学習について考え直したい、捉え直したい」というニーズに応えた、理論と実践を架橋した授業だったようである。</p> <p>また、講師は、「何のために英語力を付けるのか。何をするのか。どういう人になりたいのか。」を教師も生徒（高校生）も自分で考えるという姿勢が根本だとインタビューで述べていた。</p> <p>そのための工夫が臨機応変に多くなされ、それらは大学にも学校（高校）にも共通的な深いものであったことが、講師および受講生へのインタビューから窺えた。</p> <p>以上のことから、この授業をベストクラスに選定したい。</p>			